

Keats における超自然現象

—日本の超自然現象と対比して—

岡 田 章 子*

Keats は魔法、妖精、神話など、超自然物語を格別に愛好し、Lemprière の *Classical Dictionary* や Andrew Tooke の *The Pantheon* を愛読したと言われる。この超自然現象は Keats の多くの作品に描き出され、“I Stood Tip-Toe” や *Endymion* などのような初期の作品においても扱われるが、真に重要な役割を果たすのは1818年から1819年に至る円熟期の作品においてである。“Ode to Psyche” において神話の世界を繰り広げ、“Ode to a Nightingale” においては優れた魔法と妖精のイメージによって“Charm'd magic casements, opening on the foam/Of perilous seas, in faery lands forlorn”¹⁾ と歌いあげて想像の世界を創り出す。Keats の超自然現象の愛好は“Lamia” や“La Belle Dame sans Merci” などの魔女や“The Eve of St. Agnes” の魔法漂うロマンスの世界において一層鮮やかな描写となる。これらの物語詩においては人間と超自然の人物が想像世界において恋をし、一時的な結びつきを得たり、“The Eve of St. Agnes” の場合のように人間同志の恋人ですら Keats の魔法にかかって超自然の要素を得て、幸せの国へと去って行く。日本においても超自然現象が働く民話や昔話は数多い。人間世界の中に超自然現象が融合し、想像世界を創り出していく。しかしながら日本の伝統には真の意味で“fairy” というものはない。“fairy” にあたる妖精という言葉はあるが、本質的に西洋から移入されたものである。日本の超自然の生き物はどちらかと言えば英語の“spirit” に近く、民話もイギリスのそれに比べると通俗的で日常的である。対照的にみると、

Keats の物語詩に表われる華やかな超自然現象は日本人読者にとって新鮮で魅力的である。本稿では上記3篇の物語詩を中心に、日本の民話に現れる超自然現象と対比しながら、いかに Keats の超自然現象が日本人読者にとって魅力あるものかを考察する。

“Lamia” は Robert Burton の *Anatomy of Melancholy* を題材にした全編超自然の物語である。冒頭から神話の世界が広がり、女主人公 Lamia は悪魔の妖精であり魔女である。Katharine Briggs の *A Dictionary of Fairies* によれば、Lamia とは“A fairy creature” であると説明され、さらに続けて“The Lamia is an invention of the classical imagination, but it is clear that this was working upon a foundation of traditional folklore”²⁾ と記されている。その恋人 Lycius は現実世界の人間であり、Lamia と共に恩師 Apollonius の“Unlawful magic” (2.286) によって破滅する人物である。他に神話世界の Hermes やその恋人ニンフなど作品に登場する人物は Lycius を除いて全員魔法使いである。こう見ると“Lamia” はしばしば夢と現実、人間と非人間、詩と哲学の対比を基本に説明されるが、主な魅力は Keats の想像力によって生み出された魔法や妖精の創り出す超自然の世界ではないだろうか。“Lamia” の制作に関し、Keats の弟の George 夫妻に宛てた手紙の中で“I am certain there is that sort

1) John Keats, *The Poems of John Keats*, ed. Jack Stillinger (London: Heinemann, 1978). Keats の詩の引用はすべてこの版による。以降本文中に行数を挿入する。日本語訳は出口保夫訳『キーツ全詩集』3巻(東京・白鳳社, 1974)による。
2) Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1977, 260-61.

of fire in it which must take hold of people in some way—give them either pleasant or unpleasant sensation.”³⁾と述べている。読者をしっかり捉えるために、Keats は丹念に冒頭で神話の世界を創り上げる。

Upon a time, before the faery broods
Drove Nymph and Satyr from the prosperous woods,
Before King Oberon's bright diadem,
Sceptre, and mantle, clasp'd with dewy gem,
Frighted away the Dryads and the Fauns
From rushes green, and brakes, and cowslip'd lawns,
The ever-smitten Hermes empty left
His golden throne, bent warm on amorous thefts. (1.1-8)

この一節で Keats は読者を有史以前の世界に招き入れ、ニンフや森の神サターや森の精の群がる世界に神様 Hermes を登場させ、Hermes がどうしてクレータ島のどこかに住むニンフを捜しに王座から下りてきたかを説明する。続いて Keats は Hermes の外観やニンフの様子を記す。Hermes は「羽根のある踵」(2.23) をもち、「鳩の羽根を踵につけて」(1.42), 「金髪は悩ましい巻き毛となって」(1.26), 「花々に新しい恋を吹きかけながら飛んで行く」(1.28)。ニンフに対しては「蹄のあるサターらは皆彼女の前に跪き」(1.14), また「物憂いトライトンたちは真珠をそそいで」(1.15-16) 彼女の前にひざまづく。彼女はどのミューズにも知られず泉のほとりで水浴している。

この一節の神々や妖精の描写は特に魅力的である。日本にも水の精、火の精、山の精があり、それらは神々と密接に結びついていて、ある神

社は特定の精をつかさどる神を祭る。たとえば一つの神社は山の精の神社であり、別の神社は火の精を崇める。しかしながら、精や神の概念は西洋のそれとは異なり、Hermes のように日本の神々も立腹したり、嫉妬したり、時に喜劇的な態度に出たりするが、一般的にはもっとおそれ多く、人間を守るものである。森の精やフォーンは半人半獣であるが、日本の神や精は怪物のような形ではない。日本の水の精、山の精は姿を想像することが不可能で、全く形がなく、空気のようにただ抽象的な概念である。⁴⁾したがって、これと正反対の Keats の冒頭の鮮やかな神話の世界の描写はわれわれの心を魅了する。

Hermes がニンフをさがすのに疲れ、木の神に嫉妬して苦しんでいる時、彼は Lamia の「いつわたしはとぐろを巻く墓から起き上がるのでしょうか」(1.38) と叫ぶ声をきく。これが読者が Lamia に初めて会う場面で、神話世界をしっかりと打ち立ててから、蛇の姿の Lamia の声が聞こえるのである。彼女が Hermes とニンフと深く関わることは彼女もまたいくらか妖精の要素をもつことを意味する。これが物語の進展と共に次第に呈示される謎のような性質を予示することにもなる。この段階では読者は彼女のことは全くわからず、自分でみじめだと言うが、どうしてみじめなのかは知らされない。Lamia の状況を不明確にし、好奇心を喚起しておいて、Keats は次の20行で異常な色彩と姿を描き出す。彼女は「悔悛する女の妖精」であり「悪魔の情婦」であり、あるいは「悪魔そのもの」(1.55-56) のようで、頭は蛇で口は人間の女である。鮮やかさと共に不釣り合いな色彩で読者を驚かせる。それから彼女は Hermes に自分の夢を語る。

I saw thee sitting, on a throne of gold,

3) *The Letters of John Keats, 1814-1821*, ed. Hyder E. Rollins, 2 vols. (Cambridge: Harvard University Press, 1958) 2:189. 本稿における Keats の手紙の引用はすべてこの版による。以降本文中に巻、頁数を挿入する。

4) しかし例外がある。日本にも風神・雷神があり、屏風などにしばしば描かれる。雷神は背中に太鼓をもって雲の上を走り回るが、仏教を通じてインドから伝わったものである。相手の風神は大きな白い袋をもった緑色の神である。風神は風害から守り、収穫をつかさどる神である。風神・雷神は後述する日本の民話に登場する。

Among the Gods, upon Olympus old,
The only sad one; for thou didst not hear
The soft, lute-finger'd Muses chaunting
 clear,
Nor even Apollo when he sang alone,
Deaf to his throbbing throat's long, long
 melodious moan.
I dreamt I saw thee, robed in purple
 flakes,
Break amorous through the clouds, as
 morning breaks. (1.70-77)

ここですでに Lamia は Hermes が地球上に降りてくる有史以前の姿を夢見る能力をもつことが示される。これに比べると、日本の超自然的な生き物は Lamia ほど複雑ではない。怪物のような姿をした Lamia が Hermes の神話の世界を共有するとは不思議である。彼女は超能力をもち、Hermes の告白を聞かぬうちからニンフをさがす身であることを知っていて、“*hast thou found the maid?*” (1.80) と尋ねる。ふたりの会話の進行の中で Keats は Lamia のことを “*brilliance feminine*” (1.92) と呼び、その華麗な外観とは不調和なほどの複雑な様相を表す。この一語は Charles Patterson も指摘しているように、⁵⁾ 蛇の中に流れる女性の要素を伝えるのみならず、Lamia のこれからの状態（後に生じる変化）と過去の状態（蛇の姿になる前の状態）の両方を凝縮して示す。Lamia はかつて自分は女であった (1.117) と述べるが、Hermes も読者も女から蛇に変身した事情はわからない。Lamia が女の姿で神話の世界に存在したことがあるのか、女として人間世界に存在したことがあるのか、全く不明である。ここで大切なことは Lamia の複雑な性格で、Burton からの題材によって見事な女主人公を創造する Keats の技量を Patterson は賞賛して次のように述べる。

His [Keats's] over-all aim in the creation of the character Lamia from Burton's bare suggestion is readily discernible: to unite the charm of the womanly and the mysterious glamour of the serpentine, divested of its evil, into his most irresistible heroine. (p. 198)

今度は Lamia が魔法によってニンフを他の妖精から見えないようにして守ってやったことを語り、彼女の神秘的な魔力を最も鮮やかに現わす。

And by my power is her beauty veil'd
To keep it unaffronted, unassail'd
By the love-glances of unlovely eyes,
Of Satyrs, Fauns, and blear'd Silenus'
 sighs.
Pale grew her immortality, for woe
Of all these lovers, and she grieved so
I took compassion on her, bade her steep
Her hair in weird syrups, that would keep
Her loveliness invisible, yet free
To wander as she loves, in liberty.
 (1.100-09)

このかわいらしい魔法の実行—シロップに髪の毛を浸す—はいかにも妖精らしく童謡のような雰囲気をもたらし、蛇の姿とは程遠い。それでいて、Lamia はサターやフォーンの好色な性格を見抜き、彼らに影響を与える神話的能力を持っているのである。こういった可愛らしい魔法や妖精のこんな行動は日本の文化には見られず、西洋的な魅力に思える。日本の超自然の生き物はもっと平凡で野暮ったい。

しかしながら、彼女の蛇の性格は次の段階で明らかになる。Hermes に恋人の姿が見えるようにすることと交換に、Lamia をもとの女の姿に戻して、恋人のいるコリンスに置いてくれることを要求する。この時の彼女は蛇そのものの仕草をする。

5) *The Daemonic in the Poetry of John Keats* (Urbana: University of Illinois, 1970) 194.

Ravished, she lifted her Circean head,
Blush'd a live damask, and swift-lisping.
(1.115-16)

この願いを聞いてただちに彼は魔法の交換に同意する。今回も Lamia の魔法は単純で、彼の額に息を吹きかけ、それによって Hermes はニンフの姿が見えるようになり、結ばれる。こうして成就されたふたりの愛は夢にたとえられる。

It was no dream; or say a dream it was,
Real are the dreams of Gods, and smoothly pass
Their pleasures in a long immortal dream.
(1.126-28)

Jack Stillinger が指摘するように,⁶⁾ 夢はしばしば Keats の妖精物語につきもので、“La Belle Dame sans Merci” や “The Eve of St. Agnes” にも見られる。Lamia の魔法によって得られた恋人と共に Hermes は緑の森へと、永遠の不滅の夢の中へと飛んで行く。

変身は魔法物語につきものである。Hermes の魔法の杖によって Lamia は苦痛に満ちた変身を始める。この過程で Lamia の蛇と妖精と神話上の生き物との混合した性質が表れる。その身体は「妖精の血」(1.147) が流れると記され、その変身に伴う発作的なけいれんと苦悩は色彩と天文学的イメージで表される。この色彩豊かな変身は日本の民話では考えられない。河合隼雄は日本の有名な民話のひとつ「鶴女房」の説明の中で、西洋の妖精物語における変身と日本の民話のそれとの差異について「鶴から女性への変身は当然のことにように語られ、西洋のように魔法などということがないのが特徴的である。」⁷⁾ また河合は西洋の民話で花が少女に

変身する話を説明して、どの話ももともと女性だったのが、魔法の力によって花に変身していて、それがもとの女性の姿に帰る話と比較して次のように述べる。

これは「西洋の話は」日本の昔話で、もともとは花の精だったのが女性になること、およびその変身に関して「魔法」その他の説明がまったくないのと、著しい対比を示している。日本では人間と他の動物、植物との間の区別が西洋ほど明瞭でなく、変身は容易に生じるのである。そして、もともと植物や動物だったのが人間に変身してくるが、西洋ではもともと人間だったのが「魔法」によって変身させられており、それがもとの人間の姿にもどるのである。(p. 332)

変身を終えた彼女が再び森の中に姿を現わしたとき、その姿は小鳥に喩えられる純粋な乙女でありながら、生まれて1時間もたたないのに「秀れた知能」(1.191) をもっているという不思議な人物である。彼女が Lycius と恋におちいる場面は一層謎である。彼は彼女のことを「女神」(1.257)、水の精(1.261)、「七曜星」(1.265)と呼んで、非人間の恋人と思っており、彼女の歌う歌は Patterson も指摘するように(p. 202)、“La Belle Dame sans Merci” の歌う妖精の歌である。それでいて Lycius に見せる媚びたりそらしたりする態度は人間の女の恋のテクニクである。そして結局のところ、彼女は Lycius を愛の鎖でしっかりと捉える。ここで Keats はその人間の側面を次のように表わす。

Let the mad poets say whate'er they please
Of the sweets of Fairies, Peris, Goddesses,
There is not such a treat among them all,
Haunters of cavern, lake, and waterfall,
As a real woman, lineal indeed
From Pyrrha's pebbles or old Adam's
seed. (1.328-33)

6) “The Hoodwinking of Madeline: Skepticism in ‘The Eve of St. Agnes,’” in *Twentieth Century Interpretations of “The Eve of St. Agnes,”* ed. Allan Danzig (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1971) 67.

7) 『日本人の心』、『河合隼雄著作集 8』岩波書店、1994、140.

ここに使われる “Fairies,” “Peris” や “Goddesses” は Lamia の人間に変身する以前の姿を要約し, “Pyrrha’s pebbles” は David Perkins も指摘するように,⁸⁾ 大洪水のあと人間に姿を変えた小石を意味し, 従ってここでは Lamia の変身を象徴する。上の引用詩行に現れるイメージでは彼女のあらゆる超自然の性格と変身後の女である要素を総合する。

Lamia は「神性を脱ぎ捨て」(1.336), Lycius に人間の女として愛されることになるが, 彼女の魔法はまだ持続する。コリンスまでの3リーグの距離を数歩に縮めたり (1.345-46), 幻の宮殿を築き, 宴会場に召使いや奴隷までも魔法の力で作りあげるのである。

A haunting music, sole perhaps and lone
Supportress of the faery-roof, made moan
Throughout, as fearful the whole charm
might fade.
Fresh carved cedar, mimicking a glade
Of palm and plantain, met from either
side,
High in the midst, in honour of the bride.
(2.122-27)

ここで重要なのは音楽である。それは建築物全体を魔法にかける役割を果たすだけでなく, 宮殿を建てる妖精の作業を支える働きをする。Claude Lee Finney は Lamia の作り上げる宮殿はちょうど Milton の *Paradise Lost* に出てくる Pandemonium のように, 音楽の魔法の力によって建てられると言い,⁹⁾ また上の詩行に関して R. H. Fogle もここでの音楽は宮殿の確固たる力強さを表現すると述べている。¹⁰⁾ 音

楽のイメージはもう一度宴会の場面でも使われ, 幻の宮殿や幻の宴会を印象づけるのにふさわしいイメージとなる。この種の音楽と魔法の組み合わせは日本ではほとんど見られない。音楽は日本でも宗教と結びつき, 神々は太鼓のような楽器を持つが, 幻や魔法と結びついて作用することはない。Keats の場合, さらに進んで音楽に含まれた幻の宮殿は Lamia の妖精の世界をも象徴する。おそらく Hermes がニンフと共に去っていった森か, あるいは Lamia の変身前の住まいかもしれない “mimicking a glade/Of palm and plantain” (125-26) を重ねているのかもしれない。

結末で Lamia がどうなるかについては様々な議論がある。W. J. Bate は「彼女が消失する時, 死ぬのでなければおそらく再び蛇になるだろう」¹¹⁾ と言い, Berry Gradman は「彼女は死ぬのではなくて, とけるのだ」¹²⁾ と言う。私はどちらかと言えば Gradman に賛成である。妖精としては, はっきりと死ぬという結末よりもあいまいにとけ去る方がふさわしく思われる。Keats はこの悲劇の結末をかなり丹念に準備している。魔法の宴会のクライマックスの後, 3人の主要人物に冠をかぶせて, そのあと意味深い2行をしたためる。

Do not all charms fly

At the mere touch of cold philosophy?
(2.229-30)

この2行は Lamia の悲劇を予示し, その後すぐに Apollonius の鋭い “demon eyes” (2.289) によって, Lamia は真っ青になり, それを見た Lycius は “Unlawful magic” (2.286) と非難する。もともと恩師であり信頼すべき指導者であった Apollonius が今や魔術師と化す。Lycius は Lamia と Apollonius の両方の魔法の犠牲

8) Footnote to “Lamia” in *English Romantic Writers*, ed. David Perkins (New York: Harcourt, Brace & World, 1967) 1193.

9) *The Evolution of Keats’s Poetry*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1922) 2: 674.

10) *The Imagery of Keats and Shelley: A Comparative Study* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1949) 115.

11) *John Keats* (1963; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1982) 554.

12) *Metamorphosis in Keats* (New York and London: New York University Press, 1980) 114.

となる。日本の民話もしばしば美しく変身した女の消滅で結末となり、どこか見知らぬ世界へと立ち去ってしまう。こういう話の結末は東洋西洋共通のものなのだろう。

蛇女の変身は日本の民話でもよく見られる。有名な民話のひとつに小蛇の話がある。この蛇は村の子供たちに殺されかかっているのを通りかかった商人にお金と交換に助けられる。数日後のある夜、一人の女が商人を訪れ一夜の宿を乞う。彼女はしばらく一緒に暮らした後、結婚してほしいと頼むと、商人は独身だったのでそれを受け入れる。男の子が生まれ幸せに暮らす。ある日商人がいつもより早く仕事を終えて帰宅すると、玄関の戸が閉まっている。中をのぞくと大きな蛇がとぐろを巻いている。おそれおのいて彼は逃げ出すが、夕方になって家に帰ってみると、今度は妻の姿が見え、大きな蛇が女の姿になっていたのだと商人は了解する。彼女は昼間の自分の姿を見たことを責め、次のように言う。「わたしはいつぞや、あなたのおかげで助かった蛇です。もうどうすることもできませんから、別れましょう」と述べて、夫と子どもを残し、去ってしまう。¹³⁾

動物から女への変身は日本の超自然現象としてきわめて一般的である。たとえば、魚やきつねや鶴から女へと変身する。河合隼雄は「異類女房の話は、全世界のなかで、わが国とその近隣諸民族にのみ特異的に語りつがれていると言っているほどのものである」(p. 139) というが、Lamia も蛇女房であるから西洋にも動物妻は存在する。日本ではしばしばこれらの動物はかつて命を助けてもらってその恩返しとして女の姿になって献身する。河合も述べるように (p. 132) この恩返しは東洋の民話の特徴で仏教の影響と思われる。上述の例のように変身は突然起こる。Lamia の話のように変身の過程というものはない。また日本の民話に蛇の夫というものも登場するが、変身はより多く女に生じる。この点は西洋でも同じで、女の方に多い。おそら

く女の方が悪魔的なのであろう。

もうひとつ Keats の妖精が活躍するのは“La Belle Dame sans Merci”である。このバラッドの妖精は Lamia よりも更に神秘的な性格である。冒頭的情景は枯れた晩秋で、Patterson も典型的な妖精や悪魔や化け物の住まう場所であると指摘する (p. 134)。この背景の中で騎士は妖精の女に対する恋を語るのであるが、その前に読者の好奇心を高め、騎士の語りの劇的効果のために、まず一人の見知らぬ人物を登場させる。彼は騎士に向かって“O what can ail thee, knight at arms/Alone and palely loitering?”と話しかけ、その質問者は騎士の何とも言えない様子に驚いて何か騎士を悩ませるものがあることを予感する。こういう質問で始まる話はイギリスのバラッドではよく見られるが、日本の民話にはほとんど見られない。日本では多くは「昔々」となじみの口調でスタートする。質問を発しておいて、一転して第1連後半では荒涼たる晩秋の自然描写に移る。

The sedge has wither'd from the lake,
And no birds sing.

この情景は騎士のこれから語る体験談を暗示するばかりでなく、妖精の女の神秘性と対照となる現実世界をしっかりと打ち立てる役割をも果たす。

第2連は第1行目を反復して、続いて騎士の状況を“haggard and woe-begone”の言葉でより明瞭に表わし、この2語は倦怠と失われた愛の名残に苦しんでいることをも写し出す。騎士の外観に対する質問者のコメントは驚きを表わすと共に読者の好奇心を喚起し、騎士の語りに招き入れる。この連の後半の2行“The squirrel's granary is full/And the harvest's done.”は第1連の晩秋の荒廃と対比をなし、小動物の収穫を終えたあとの安らぎを表わしている。菅、小鳥、りすなどの生物が生命ある活動を今や終了したことを示し、こんな季節に生命あるものが見られるはずはないという気持ちで騎士の孤独な存在を強調する。

13) 「母の目玉」、『日本の昔ばなし(I)—こぶとり爺さん ちかちか山』関敬吾編、岩波文庫、1995、44-46.

質問者の騎士の容貌の観察は続く。

I see a lily on thy brow
 With anguish moist and fever dew,
 And on thy cheeks a fading rose
 Fast withereth too.

ここでゆりやバラのイメージは質問者が騎士の苦悩は恋に関わるものであることを直感していることを暗示し、それに付加される“anguish”や“fever dew”は情緒的緊張を示す。“fading”と“withereth”の同じ内容を二重に表わす用法はたった今終わったばかりの恋を強調し、そのために騎士は極度の苦悩を感じていることを表現する。この連は2連までの自然の風景と4連以下の騎士の語りの橋渡しをする場面である。この質問者は性別も年齢も全く不明で、この匿名性がかえって読者の好奇心をそそる。これだけの設定に続いて妖精との恋物語が始まる。

I met a lady in the meads
 Full beautiful, a fairy's child;
 Her hair was long, her foot was light,
 And her eyes were wild.

この簡潔な妖精の描写はほとんど意味を持たず、彼女の外観も性格も表わさない。これは日本の民話にも共通することで、人物は個性も外観も特徴をもたないのが普通である。騎士はなんとか今自分に起こったことを表現しようとするが、極度の緊張のためにうまく言いあらわせない。ここに並べられる形容詞—beautiful, light, wild—は雰囲気を作り出しはするが、これと言った内容はもたない。“Wild eyes”というのは日本人読者にとってどんな目か想像するのは難しく、“wild”という形容詞を目に付すことはない。もっともこの点に関して Judy Little もこの形容詞はどんな目か表わしはしないと述べている。¹⁴⁾ この“wild”は第8連でも反復される

が、何かを意味するよりは情緒を創り出すために使われているようだ。Little はさらに続けて妖精の性格描写の欠如は彼女を騎士からも読者からも距離をもたせている (p. 104) と指摘する。このあいまいさと距離感のゆえに日本人読者には何か憧れのような感じを抱かせる。日本の神や精も神秘的ではあるが、本質的に日常生活や農耕と結びついたものであり、妖精のように空想的な姿にはならない。民話学者である関敬吾は日本の民話には恋愛、とくに恋の冒険や犠牲的な恋は描かれることがなく、生活の安定を意味する結婚が題材になると指摘する。¹⁵⁾ 日本には騎士道の伝統がなく、日本の武士道には恋の要素は含まれないので、騎士や淑女のロマンチックな恋はわれわれには新鮮で空想的に思えて、心惹かれるのである。

騎士は話を続けて妖精と馬に乗って進む間に花環や腕環や花の帯を与えたということを示す。それに対して、彼女は甘く悶え、Lamia のように妖精の歌を歌う。こういうエロティシズムも日本の精には見られない。Patterson はこの妖精には“mystery, glamour, delicacy, femininity, high sexuality, and haunting appeal” (p. 138) が見られると述べているが、われわれには大変魅力的である。騎士が妖精に次第にとりこになっていく様は、彼女が与える食べ物の列挙によって表わされる。

She found me roots of relish sweet,
 And honey wild, and manna dew.

Keats の詩では食物のイメージはしばしば魔法の世界を作り出し、魅惑を強調する作用をする。一例として“The Eve of St. Agnes”において、Porphyro が食物を積み上げ、Madeline が眠っている間に饗宴を準備し、それが二人の結合へと導いて行く。このような用法で食物のイメージが日本の民話に使われることはなく、食物が高尚な意味の魅惑と結びつくことはない。このバラッドでは妖精は食物のイメージで二人

14) *Keats as a Narrative Poet: A Test of Invention* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1975) 104.

15) 『民話』岩波書店, 1958, 187.

の結合を完結し、一方騎士は不確かな面持ちで彼女が“I love thee true”と言ったような気がすると言う。この不確かさが“sure”と“language strange”の2語で一段と強調される。

洞窟の中で騎士は眠りに落ち、夢を見る。洞窟はしばしば妖精の住まいであり、夢は妖精の世界につきものである。かくて、設定はすべて妖精の舞台となる。しかしながら、洞窟の中で彼女は泣いたりため息をついたりするのだから、彼女は全く謎である。この“she wept, and sigh'd full sore”という行動は複雑な意味を持つ。ひとつは彼女の愛があまりにも強烈で苦痛なほどであるという意味を持ち、もうひとつは結合の後、姿を消さねばならないことを予知した上での態度であり、あるいはこういうしぐさで騎士を誘惑しようとしているのかもしれない。このような嫌なそぶりを見せながら、本当は誘惑しようとするのは Coleridge の“Christabel” (1.245-59) にもあらわれるが、日本の民話ではこのような魔女は登場しない。相手の騎士は彼女の悲痛を理解していないが、彼女をなだめる。すると次の瞬間洞窟の中で捕らわれの身となって、騎士は突然離される。この体験のクライマックスは急激で、恐怖に満ち、しかも予期せぬ出来事である。結合に続く恐怖はそれまでのあいまいさと対照的にきわめて具体的に記述されて、その犠牲者は青白い王や王子、蒼白の騎士たちと逐一列挙される。彼らの「つれなき妖女が汝をとりこにしたのだ」という叫びは強烈で、この瞬間に騎士は彼の完全な束縛とその恐怖を認識するのである。強烈な愛のなごりを示すものは“starved lips,” “horrid warning,” “gaped wide”の言葉である。

恐怖もしばしば日本の民話に描かれるものであり、それが夢と結びつくことも多い。一例として「怪我の功名」がある。貧しい行商人が豊かな家の娘と結婚した。近所に住む農夫が怪物が出没して田畑を荒らすので困って、その行商人に退治してくれるように頼んだ。彼が怪物をやっつけに出かけようとしたとき、妻は彼を嫌っていたので、昼食のおにぎりに毒を入れた。日が暮れて森の中で怪物の出現を待ち伏せてい

ると、二つのキラキラ光るものが大きな音を立てて生臭い風に乗って近づいてきた。驚いた彼は木に登った。その怪物は大きな蛇で、二つのキラキラ光るものは大蛇の目玉だった。大きな口を開けて蛇は行商人に襲いかかろうとした。彼は恐ろしさのあまりブルブル震えたので、彼の持っていた毒入りのおにぎりが蛇の大口の中に落ちた。夜が明けると怪物が死んでいるのが見つかった。結局、すべて行商人の夢だった。¹⁶⁾一瞬の恐怖と夢は多くの民話に扱われる。

「つれなき妖女」の最終連は第1連を反復する。それによって最初の話し手の存在を想起させるのである。今話した体験談が質問に対する答えであることを明確にするため、騎士は“this is why I sojourn here.”と述べる。この代名詞の“this”は重要な意味を持つ。Leon Waldoffはこの一語について次のように説明する。

At the end of the poem, when the knight attempts to summarize his experience with the remark, “And *this* is why I sojourn here,” the demonstrative pronoun becomes one of the most overdetermined words in all of Keats’s poetry, suddenly bearing the burden of meaning for the entire poem and at the same time frustrating efforts to interpret it.¹⁷⁾

この一語によってこれまで語ってきた体験と現在の青白い額をしてさまよう状況の両方を要約する。こうして状況を冒頭に戻すことによって円環性の効果を狙い、Keatsは結論を出さずに話を終える。Stillingerは妖精の女と再び会うことを望んでさまよっていると述べているが(p. 68)、私は賛成しない。騎士は魔法にかかってそこから抜け出せなくて、何も考えていないと思いたい。これはまた騎士が自分で語ったこ

16) 『日本の昔ばなし(III)——一寸法師 さるかに合戦 浦島太郎』関敬吾編 岩波文庫、1955、169-73.

17) *Keats and the Silent Work of Imagination* (Chicago: University of Illinois Press, 1985) 86.

とをも不確かに思っていることを示す。彼はただ尋ねられたから答えたのですという気持である。騎士は語りの中でコメントもなく感情も込めず、淡々とした語りに終始するが、この単純さがかえって情緒的困惑を示す。妖精の女の神秘性とこの不確かな美しさがこの詩の中心的要素である。David Perkins は「この詩は不確かなだけでなく、不確かさについての詩である」¹⁸⁾と評しているのは適切である。

Keats のもうひとつの魔法と妖精の魅惑は中世ロマンス “The Eve of St. Agnes” に見られる。“Lamia” や “La Belle Dame sans Merci” と異なり、ここには超自然の恋人は登場しない。しかしながら、この作品では魔法の背景を打ち立てることにより、登場人物も読者も共に魔法にかけてロマンスの世界を繰り広げる。Keats は意図的にスペンサーの *The Faerie Queene* を思わせるスペンサー・スタンザを用い、その雰囲気に移そうとする。Keats は Taylor 宛ての手紙の中で将来の詩作について述べ、このロマンスに触れている。

I wish to diffuse the colouring of St. Agnes eve throughout a Poem in which Character and Sentiment would be the figures to such drapery. (*Letters* 2:234)

この点に関し、Finney もこの物語は人間世界の話であるが、聖アグネス祭前夜の言い伝えが人物を超自然の世界に導き、ロマンスの進展を促していることを指摘して次のように述べている。

The amorous rites of St. Agnes' Eve, about which the action of the romance hinges, belong to the plane of the supernatural and the magical but the story is worked out in the natural and human plane. (2:551)

18) *The Quest for Permanence: The Symbolism of Wordsworth, Shelley and Keats* (1959; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969) 263.

確かにこれは自然界に展開する超自然の物語である。物語は冬の厳しい寒さで始まり、中世の城に導いて行く。そこで女主人公 Madeline は宴会の客のざわめきの中で “Hoodwink'd with faery fancy” (70) となり、“St. Agnes' charmed maid” (192) と呼ばれる。恋人の Porphyro は彼女に会うため敵の城に危険を冒して入り込むが、彼の描写には多くの魔女や悪魔のイメージが付される。彼の Madeline との結合も魔法や妖精の漂う世界の中で進展し、結末において二人は「幻のように」(361)、「おとぎの国から吹く妖精の嵐の中」(343)へと去って行く。最初から最後まで超自然の世界に包まれて恋は繰り広げられるのである。エピローグで祈禱僧、アンジェラ、男爵の城の中の敵たちが魔法にかけられ、あるいは酔っ払って横たわる。“Lamia” では Lycius 以外の人物は皆魔力をもつが、ここでの二人の恋人は魔力を持たない。むしろ、Keats によって創造された超自然世界の中で人物は魔法にかけられてしまうのである。

この超自然世界を打ち立てるために、Keats は語り手として特別の働きをする。Fogle はこの役割を “the poet in his role of enchanter” (p. 205) と呼び、Marian Cusac はこの点を更に発展させて次のように説明する。

The phrase “the poet in his role of enchanter” means the person who conveys the tale to us, the story-teller who creates both mood and character, who weaves in magic manner the fibres of his tapestry, who, in short, enchants us not only into mere acceptance of his story but into belief in its witchery.¹⁹⁾

しかし Keats は注意深い語り手で、魔法の世界を創るためには、まずしっかりと現実世界を設定する。冒頭で凍った草の中を震えながら飛び跳ねる野兎や凍りついた祈禱僧の吐く息を

19) “Keats as Enchanter: An Organizing Principle of *The Eve of St. Agnes*,” *Keats-Shelley Journal* 17 (1968): 114.

丹念に描写する。この現実の上に Fogle が “fairy unreality” (p. 205) と呼ぶ情景を繰り広げ、その中に女主人公を登場させる。

At length burst in the argent revelry,
With plume, tiara, and all rich array,
Numerous as shadows haunting fairily
The brain, new stuff'd, in youth, with
triumphs gay
Of old romance. These let us with
away,
And turn, sole-thoughted, to one Lady
there,
Whose heart had brooded, all that win-
tery day,
On love, and wing'd St. Agnes' saintly
care,
As she had heard old dames full many
times declare. (37-45)

ここでは Madeline を妖精世界に属する人間の恋人として登場させるためにふさわしい舞台を準備するのである。“Argent revelry” というロマンティックで抽象的な集合名詞を用い、それに続いて “plume, tiara, and all rich array” と具体的な名詞を列挙し、それらが統合的に “shadows haunting fairily” と喩えられる。この抽象的な言葉と具体的な列挙の組み合わせは、聖アグネス祭の迷信に取りつかれていながらも現実的な鮮やかさを持つ Madeline を印象づけるのにふさわしい。

こうして女主人公を登場させると、今度は Porphyro の城の敵に焦点が合わされる。

For him, those chambers held barbarian
hordes,
Hyena foemen, and hot-blooded lords,
Whose very dogs would execrations howl
Against his lineage. (85-88)

この敵は動物のイメージを用い、喜劇的な言葉を連ねて表現される。詩の結末でこれらの喜劇

的な人物は悪夢にうなされ “shade and form/
Of witch, and demon, and large coffin-
worm” (373-74) になり、もはや敵ではなく、無害のおびえた生き物となる。

ロマンスの土台ができ上がると、Keats は恋人たちの話を進める。Porphyro は老女 Angela の案内を請うて月光の射し込む Madeline の寝室に入り、彼女の寝姿を眺めると、彼女はすっかり妖精の世界に浸っている。

...legion'd fairies pac'd the coverlet,
And pale enchantment held her sleepy-
eyed. (168-69)

これに続いて謎のような2行を付け加える。

Never on such a night have lovers met,
Since Merlin paid his Demon all the mon-
strous debt. (170-71)

この2行の意味は不明で出典も定かでないが、Merlin は女魔法使いに恋をし、彼女によって永久に魔法の塔に閉じ込められると言う話が伝わっている。この2行は何かの意味を伝えようとするよりは、Cusac も指摘するように (p. 116), Madeline と Porphyro の恋に魔法をかける働きをしているように思われる。Stillinger はもっときっぱりとこの詩行を語り手の策略のコメントだという (p. 55)。そして前に使われた “legion'd fairies” や “pale enchantment” のイメージと結びついて、魔法と妖精を鮮やかにする働きをすると述べている (p. 56)。Keats は幻の世界に現実味を帯びさせるために恋人たちにしっかりと魔法をかける必要があるのだろう。

魔法をかけられた Madeline の世界を象徴するのは窓辺の場面である。Keats は魔法の働きを表わすためにしばしば濃厚なイメージを用いるが、ここでも花や宝石や聖者の彫刻などの華やかで具体的なイメージが連なる。

A casement high and triple-arch'd there
was,

読者は Keats の華やかな感覚的な魔法や妖精に魅せられる。騎士と神秘的な妖女のロマンティックな恋物語, Lamia のつくる幻の宮殿, 中世の城に繰り広げられる魅力的な Madeline や Porphyro に憧れを感じるのである。

参 考 文 献

- Bate, W. J. *John Keats*. 1963; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1982.
- Briggs, Katharine. *A Dictionary of Fairies*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1977.
- Cusac, Marian. "Keats as Enchanter: An Organizing Principle of *The Eve of St. Agnes*," *Keats-Shelley Journal* 17 (1968): 113-19.
- Finney, Claude Lee. *The Evolution of Keats's Poetry*. 2 vols. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1922.
- Fogle, R. H. *The Imagery of Keats and Shelley: A Comparative Study*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1945.
- Gradman, Berry. *Metamorphosis in Keats*. New York and London: New York University Press, 1980.
- Keats, John. *The Poems of John Keats*. Ed. Jack Stillinger. London: Heinemann, 1978.
- _____. *The Letters of John Keats 1814-1821*. 2 vols. Ed. Hyder E. Rollins. Cambridge: Harvard University Press, 1958.
- Little, Judy. *Keats as a Narrative Poet: A Test of Invention*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1975.
- Perkins, David. *The Quest for Permanence: The Symbolism of Wordsworth, Shelley, and Keats*. 1959; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969.
- _____, ed. *English Romantic Writers*. New York: Harcourt, Brace & World, 1967. "Footnote to Lamia"
- Patterson, Charles I. *The Deemonic in the Poetry of John Keats*. Urbana: University of Illinois, 1970.
- Stillinger, Jack. "The Hoodwinking of Madeline: Skepticism in 'The Eve of St. Agnes,'" *Twentieth Century Interpretations of "The Eve of St. Agnes."* Ed. Allan Danzig. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, 1971.
- Waldoff, Leon. *Keats and the Silent Work of Imagination*. Chicago: University of Illinois Press, 1985.
- 河合隼雄『日本人の心』『河合隼雄著作集』8巻, 岩波書店, 1994.
- 関敬吾編『日本の昔ばなし(Ⅰ)—こぶとり爺さん かちかち山』岩波文庫, 1995.
- _____, 『日本の昔ばなし(Ⅲ)—一寸法師, さるかに合戦, 浦島太郎』岩波文庫, 1995.
- _____, 『民話』岩波書店, 1958.
- 出口保夫訳『キーツ全詩集』3巻, 東京・白鳳社, 1974.

本論文は1998年度桃山学院大学特定個人研究費によって作成されたものである。

The Supernatural Elements in Keats's Poetry, in Comparison with Japanese Supernatural Concepts

Akiko OKADA

Magic, fairies, and myth are prevalent in many of Keats's poetry. His keen interest in the supernatural elements is especially evident in the fairy heroines in "Lamia" and "La Belle Dame sans Merci" and in the enchanting background in "The Eve of St. Agnes." In these lyric narratives, the mortal-immortal lovers enjoy a momentarily brilliant union in the visionary world, and the mortal lovers in "The Eve of St. Agnes" gain superhuman qualities as they are enchanted by Keats's skillful spell. Japan has also a tradition of myth and folklore where magic and supernatural elements are fused in the human world, but we do not have fairies; "fairies" essentially came from Western culture, and our folktales are much more humble and commonplace. In contrast, Keats's splendid treatment of these elements in the narrative poems particularly attracts me. This essay explores how the magic and fairies work in the three narrative poems named above, in comparison with Japanese folklore and shows how charming Keats's supernatural elements are to the Japanese mind.

In "Lamia," all sorts of supernatural phenomena—the mythological background, brilliant magic, transformation, and mortal-immortal lovers—are contained. In "La Belle Dame sans Merci," the fairy is a most mysterious heroine, and the mortal-immortal love is highly intense, being followed by momentary horror, though the knight is uncertain of what has happened to him. In "The Eve of St. Agnes," though we do not have mortal-immortal love nor the practice of magic nor the metamorphosis, the reader and the characters are always enchanted by Keats's spell. In the end the mortal lovers are shifted to fairy lovers and are gone into a visionary realm.

Japanese folktales have supernatural creatures; however, they are more properly called "spirits" akin to gods, than fairies. Usually, they are shapeless like air, unlike monstrous Western fairies. The mortal-immortal union is also prevalent in Japanese supernatural tales. But the union is seldom love, usually marriage, and the stability of life. Very frequently, the mortal-immortal marriage is animal-human marriage. As the animals once had their lives saved by men, they appear in the form of women and devote themselves as wives to repay the kindness. This grateful repayment shows a feature of our folktale. They obediently keep house and produce children by spell. After a while, they return to their original animal form or disappear to another realm. In the mortal-immortal relations, women tend to be magicians and demons and transform themselves as in the case of Keats's three narratives. Probably it is universal that women are more likely to be devilish by nature.

Another characteristic of our folklore is that our spirits are linked with ordinary common people and common places, not with kings, queens, knights, and castles like Keats's subject matter. Japanese supernatural creatures are not so romantic; rather, they are related to daily life. This difference makes us fascinated with Keats's glorious, sensuous magic and fairies. We adore the romantic love story of the knights and the mysterious fairy lady in "La Belle Dame sans Merci," the lovely mythological background and the magic palace in "Lamia," and the charming Madeline and Porphyro in the medieval castle.